

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理

Monthly Bulletin Vol.26 No.12 December 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

12

CONTENTS

- ・卷頭言
神話の話は飛躍する
／井上 昭洋 1
- ・文脈で読む「身上さとし」(22)
明治 22 年 11 月～12 月
／深谷 耕治 2
- ・英語文献にみる天理教 (13)
『The Gist of Japan』 (3)
／尾上 貴行 3
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (29)
文物が語る音の世界—唐代の鼓—
／中 純子 4
- ・ブラジルの宗教的風景 (9)
アンテベラム期の米国系プロテスitanト教会による布教活動③
／中西 光一 5
- ・ニューヨーク通信 (26)
ニューヨークのホリデーシーズン
／福井 陽一 6
- ・2025 年度公開教学講座：「元の理」の
学術的研究とその新しい展開を求めて
(6)
第 6 講：「元の理」の見立て・象徴論
／澤井 真 7
- ・おやさと研究所ニュース 8
日本宗教学会第 84 回学術大会に参加
／第 4 回天理大学・マールブルク大
学共同研究プロジェクト報告／2026
年度公開教学講座のご案内

卷頭言

神話の話は飛躍する

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

神話は、それが口承される間に様々な語り手の手が加わったり、さらに異なる集団の物語が混じり合ったりした結果、しばしばストーリーに断絶や飛躍が生じる。このことは 9 月号の卷頭言で指摘したが、「話が飛躍する」という神話の特徴は、創世神話についてもよく当てはまる。例えば『古事記』においても、天地開闢の抽象的な神々の時代から、人格神であるイザナギ・イザナミによる国産みの時代へと物語は大きく飛躍する。さらに、高天原を舞台とした物語からスサノヲの八岐大蛇退治など、地上（出雲）を舞台とする物語へ、そして神代から天皇の系譜を述べる人代へと、幾つかの断絶が見て取れる。特に、神代から人代への転換は、死と再生を繰り返す循環的な神話的時間から、天皇の系譜が継承される直線的な歴史的時間への移行であり、大きな断絶と言える。

前号の卷頭言で紹介したマヤの創世神話である『ポポル・ヴフ』にも、同様の断絶が見られる。まず最初に神々は世界を創造し、3 度の試みを経て人間を誕生させる。しかし世界はいまだ不完全で太陽と月は存在せず、冥界が闇を支配していた。ここで登場するのが、球技を好む双子の兄弟フン・フンアフラーとヴクフ・フンアフラーである。彼らは冥界の神々の怒りを買い、呼び出されて殺されてしまい、兄の首は切り落とされて木の枝に掛けられ、ヒカル（瓢箪）の実に姿を変える（死体化生神話）。

しかし、その実が女神を懷妊させ、地上に逃れた女神は双子の兄弟、フンアフラーとイシュバランケを産む。2 代目の双子は父を殺した冥界の神々に挑み、自ら死ぬことで神々を打ち破る。そして兄は太陽に、弟は月に姿を変え、昼と夜、光と闇が確立して世界は完成する。このように、『ポポル・ヴフ』では、創造神による天地・動物・人間の創造を語る創世神話と、英雄双子が冥界の神々を打ち破り、太陽と月になって宇宙の秩序を確立する双子神話との間に明確な断絶がある。

ハワイの創世神話『クムリポ』は、2,102 行から成る壮大な叙事詩である。19 世紀末にカラーカウア王が公表し、それを妹のリリウオカラニ女王が英訳した。この神話は 16 章から成り、前半の 8 章は「夜（ポー）の時代」として天地と生命の創造を語り、後半の 8 章は「昼（アオ）の時代」として英雄譚や人間社会の成立、王族の系譜を語る。

前半の夜の時代では、深い闇に包まれた原初の海に珊瑚や海藻が発生し、魚類、両生類、鳥類、哺乳類と順々に生き物が生まれ、自然界が形成されていく様子が描かれる。続いている自然を司る神々が誕生し、さらに大地の女神パapaと天空の男神ワーケアの間に島々が誕生する。ワーケアとその娘ホオホークー・カラニとの間に生まれた次男ハーロアが人間の祖となることは前号の卷頭言で紹介したとおりである。後半の昼の時代では、文化英雄の英雄譚に加え、首長の血統の起源や島々の首長の系譜が語られ、最終的にカメハメハ王家に繋がる王族の系譜が裏付けられる。このように、『クムリポ』では、生命的創造に始まり、神々の誕生から人間の起源に至るまでを描く「夜の時代」と、人間の誕生以降の文化英雄や首長の物語、そして王族の系譜を語る「昼の時代」との間に、明らかに大きな断絶がある。

1 つのまとまった物語のように見えて、神話の話は飛躍する。異なる神話がつなぎ合わされたかのように感じられることさえある。その断絶を、天皇や王家などの系譜の正統性を示そうとするような、ある意図を持った編纂・編集の産物と捉えるのか、それとも神話本来が持つ特性と見なし、例えばそこに自然から文化への転換といった構造的な節目を読み解こうとするのか。歴史の検証を重んじる実証主義か、物語の構造を読み解く構造主義か——どの視点に立つかで、神話の断絶についての解釈は異なってくる。

明治 22 年 11 月～12 月

天理大学人文学部講師
深谷 耕治 Koji Fukaya

明治 17 年の初参拝以来、増野家に対してはおぢばへの伏せ込みが何度も論されており、ついに明治 22 年 12 月 31 日に増野正兵衛は神戸を引き払って、おぢばに伏せ込むようになる。『増野正兵衛傳』によれば、大晦日に神戸を出発して、大阪の梅谷四郎兵衛宅に立ち寄って、そこで正月を迎える。翌日におぢばに引き移ったとある。最初は、足達照之丞の隠居所を借り受けて住まいとした。そのとき妻いとは妊娠 8 カ月であったが、しばらくして長男・道興が生まれる。今回は、おぢばに移る直前の明治 22 年 11 月～12 月の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治 22 年 11 月 1 日：増野正兵衛神戸へ帰宅御許し願
- ・11 月 20 日：増野正兵衛前々おさしづに『継ぐ間違うのち～十分一日の日』と御聞かせにあづかり、就ては正兵衛三年以前に隠居致し、松輔を本人と定めましたが、違いますかの伺／同日、春野ゆう前におぢばへ参詣の時、身上障りに付おさしづを蒙り、大阪の春野宅へ帰り、又身上の障りだん～重り、横に寝る事も出来ず、前おさしづにより諭し速やかおたすけありしが、今度は身上救かる事難しきや伺／同日、増野正兵衛明日より神戸へ帰る事御許し願
- ・11 月 30 日：増野いと左の腹に差し込むに付願／同日、押して日々の心の理を定めるのでありますか、又こちらへ来る心を定めさすのでありますか願
- ・12 月 8 日：増野正兵衛内々一統協議の上、おぢばへ引越しますに付、村田長平向の家か、三番地の足達源四郎離座敷借り受けるか、いづれ宜しきや願／同日、三島村城甚三郎所持の田地五畝十歩買入れ、名前書換え、本席会長御名前に御願申上げし処、増野正兵衛名義に書換え置けとの事に付御許し願
- ・12 月 14 日（陰暦 11 月 22 日）午前 6 時：中山会長始め、橋本清、舛井伊三郎、梅谷四郎兵衛、増野正兵衛、河原町分教会所開筵式に出張の儀御許し願
- ・12 月 19 日：増野正兵衛河原町分教会所開筵式に行き、十五日夜より腹痛夜々二度、昼も二度に付伺
- ・12 月 20 日：増野正兵衛借家も普請中に付、その出来るまで引越御許し願、それとも急に引越す方宜しきや、月を越ても宜しきや伺

明治 22 年 11 月 1 日、増野正兵衛は「神戸へ帰宅御許し願」で伺っている。「さあ～尋ねる処～、心に身上掛かる。心置き無う行って来い。又直ぐと。」と、最後に「又直ぐと（戻ってくるように）」と付け加えられているのが印象的である。神戸に戻ることで、おぢばへと定めた心が揺らがないように、とのことであろう。

11 月 20 日に、以前に頂いた「おさしづ」の内容について改めて伺っている。「継ぐ間違うのち～十分一日の日」とあったので、正兵衛は 3 年前に隠居し、甥の増野松輔（姉の長男）に家督を譲っていたが、今回そのことの是非について伺うと、「もう長くの処の理を待てとは言わん、通れとは言わん。旬々のいかなる理を知らそう。」と、旬の理について説かれている。松輔は足が不自由だったようだが、増野家の稼業を支えるべく、神戸で足袋職の修行をしたりしていた。度々身上の障りについて「おさしづ」を伺っているが、結果的には、3 年後の明治

25 年 1 月 21 日に若くして出直す。

同日、妻の母・春野ゆうの身上の障りについても伺っている。1 カ月前に、喘息の障りについて「おさしづ」を伺ったときは、「難儀さそう、不自由さそう神はあろうまい」「不自由難儀は人間にといんねん、身上速やかなれば心も勇む」といんねんに関するお言葉を頂き、速やかにたすかったが、今回は「身上的障りだん～重り、横に寝る事も出来ず」という容体で「今度は身上救かる事難しきや」と伺っている。「どれだけ心に諭しても、心に治まらねば治まらん。一つ話成程十分、話十分諭し、いんねん一つの理は諭してくれるよう。」と、またも「いんねんの理」について説かれている。

11 月 30 日に、増野いとの「左の腹に差し込む」に付いて伺っている。『増野正兵衛傳』によると、いとはおぢばに住み込むことは同意しつつも、当時「世間の人から夜逃げと思われたくないで、せめて正月を神戸で迎えてからおぢばに出発したい」と主張していたようである。すると「こらへられないほどの歯痛」が起ったが、「早速出発の事に事情を定めて御願すると、夢のやうに痛が止んだ」。左腹の障りと歯痛が生じた順番は明らかではないが、この「おさしづ」では、「あちら一つ身が障る、こちら一つ身が障る。心に重々思う。早く十分洗い取れ～。」と、いずれの身上であっても「（心のほこりを）洗い取れ」と諭され、「案じる事は要らん。」「こうと言えばこうという、一つの理を治め。」と説かれている。この諭しを受けて、さらに押して「日々の心の理を定めるのでありますか、又こちらへ来る心を定めさすのでありますか」と伺うと、「こうと言えばこちら思え。いつになったら十分聞いて置け。こうという理を治めてやるがよい。いついつ治まるという。」と、今すぐ治まらないことでも、「こう」と言わされたら「こう」と素直に受ける心について再び諭されている。

12 月 8 日に、おぢばでの住まいについて「村田長平向の家か、三番地の足達源四郎離座敷借り受けるか」と具体的に伺うと、「どちらどうとも言わん。なれども大層する事要らん。軽うして心に置くがよい。」と述べられている。また、近隣の土地購入に際する名義変更について伺うと、「一つの心は今一時、秘そか秘そか」と伝えられており、住まいにしても名義にしても今はまだ一時的なものという説かれ方がなされている。

14 日に、河原町分教会所開筵式の出張に関してお許しを願うと「どれだけの事、どんな者も悪い者は無い。をやの理を以て治めて来るがよい。」と「をやの理」について諭されていたが、正兵衛は翌 15 日の夜から「腹痛夜々二度、昼も二度」あったようで、19 日に改めて伺うと、「大き心の理を治め。案じる事は一つも要らん。」と説かれている。

20 日に、「（おぢばでの）借家も普請中に付、その出来るまで引越御許し願、それとも急に引越す方宜しきや、月を越ても宜しきや」と伺うと、「早く事情どういう処十分、暫くの間どうでも不自由々々々、不自由が日々のこうのう。」と、不自由の中に「効能の理」があることが伝えられている。そしていよいよ 31 日に、神戸を出発する。

[註]

(1) 『増野正兵衛傳』(私家版、1923 年)、55～56 頁。

『The Gist of Japan』（3）

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 *Takayuki Onoue*

前回に引き続き、『The Gist of Japan』のなかの天理教に関する記述を見ていく。著者ピーリーは、天理教の信仰実践には日本のほかの宗教とは大きく異なるところがあると指摘。仏教徒が参拝や説教を聞くために寺に集まるのは年に3、4回程度で、神道の場合はほとんどそのような機会はない。しかし、天理教の信者は礼拝したり、教えを聞いたりするためにしばしば集まっていると述べている。また、天理教の排他性を挙げ、日本の宗教は互いに寛容であり、複数の教えを信仰している人もいるが、天理教信者は天理教だけに忠誠を誓わなければならないと記している。

ついで、キリスト教との関連について述べている。キリスト教の宣教師や信仰者が天理教について述べる際、キリスト教との関係についての言及がしばしば見られるが、ピーリーは、

天理教におけるキリスト教の影響を考えてみると興味深い。過去二、三百年のカトリックの伝統がなんらかを通じてミキに伝わっていない限り、彼女がキリスト教の影響を受けていたように思われる。しかし、のちの教師たちによる教団の拡張や発展はキリスト教から大きな影響を受けている。現在、説教を行う際にキリスト教の教えから借用している布教師もいる。一般の人々は、概して天理教をキリスト教と関連したものとしてみている。

と解説している。

このキリスト教との関連性について述べた後、天理教に関する記述は終了している。さらに、ピーリーはその他の宗教団体として蓮門教と黒住教の名前を挙げている。しかし、詳しく記すほどの重要性を持っていないとして、特にそれ以上の言及はしていない。そして、当時の日本における宗教事情に関するまとめとして、「日本の三大宗教である神道、仏教、儒教は、日本社会に縦糸と横糸として完全に織り込まれている。キリスト教が西洋の政治、社会、家族生活を形作ってきたように、これらの古代からの信仰は、日本においてその役割を果たしている。人々の法、道徳、作法と習慣のすべては、これらの宗教によって決められてきた。」と述べ、日本人にとって神道、仏教、儒教は幸福な生活を導く原則であり、基盤となっていると説明する。ここに天理教は含まれていない。しかし、これらの三大宗教には迷信的な要素があり、知的傾向を強めている社会状況へ十分に対応できず、徐々に衰退していくと考えられ、最終的にはキリスト教がその立場にとってかわるだろうと記している。

『The Gist of Japan』は、当時出版された日本に関する多数の著作のなかの一つであり、欧米社会で発行されていた新聞や雑誌などにこの書籍を紹介する記事が散見される。たとえば、ロンドンで発行されていた『Pearson's Weekly』1898年2月12日号の推薦図書のページでは、著者ピーリーによれば同書の内容は日本におけるキリスト教の宣教活動についてであるが、その前半部分では日本人々、歴史、社会、習慣、道徳などが詳しく述べられていると紹介。そして、日本ではすでに神道、仏教、儒教、そして天理教の4つの宗教が確立していると同書に記されているが、そのような文明化された人々に対する新しい宗教、つまりキリスト教の宣教は、未開の地の人々へ教えを伝えていくこととは大きく異なるだろうと述べている。さらに、日本人は宗教に対して非常に寛容であり、とくに神道、仏教、儒教に関しては、それ

らの教えをすべて受け入れ、信じることに何の矛盾も感じておらず、また各宗教間には敵対関係も生じていないようであり、そのような状況下では、新たな教えであるキリスト教に排他性があれば、容易には受け入れてもらえないだろうと述べている。

また、オーストラリアのメルボルンで発行されていた『The Australasian』の1897年11月20日号の文学欄でもこの『The Gist of Japan』が取り上げられている。アメリカ人宣教師が記した書物であり、その内容として日本の宗教について「何世紀にもわたって仏教が神道を凌駕し、強い影響力を有している。儒教もまた何百万人もの信徒を有している。新しい宗教である天理教はこの100年で大きく発展している。しかし、これらの宗教は互いに排他的ではない。すべての教えを深く信じている人もいれば、それぞれを少しだけ信仰している人もいるようである。」と紹介している。さらに、アメリカのニュージャージー州で発行されていた週刊誌の『Bridgeton Pioneer』1903年9月24日に、日本におけるキリスト教関係の書籍を紹介する中で、有益かつ興味深いものの一つとしてこの『The Gist of Japan』がリストアップされている。このように、『The Gist of Japan』は、当時欧米で発行されていた新聞や雑誌などで、日本に関する参考図書の一つとして紹介されていたのである。

ピーリーはこの『The Gist of Japan』の冒頭で、執筆にあたり参考した文献として、『Transactions of the Asiatic Society of Japan』と『Japan Mail』を挙げている。これらにD.C.グリーンの論文「Tenrikyo, or the Teaching of the Heavenly Reason」やその他の天理教に関する記事が掲載されていたことは以前に本連載で見てきた。『The Gist of Japan』とD.C.グリーン論文とは内容的に非常に似ている部分が認められる。ピーリーはおそらくグリーンの論文を読んでいたと推察でき、ピーリーの天理教に関する記述の多くはグリーンの論文を大いに参考にしていると言ってもよいだろう。ただし、グリーンが執筆したのは学術論文であり、それは天理教に焦点を当て、自身で収集した資料、教会本部や地方教会への訪問、そしてインタビューなどに基づいて書かれている。一方、ピーリーはキリスト教の宣教について述べることを第一の目的として執筆したのであり、天理教は日本の宗教事情を紹介するなかで特筆すべき一宗教として取り上げている。またピーリーの著作は、日本の国土、人々、社会、文化を広く紹介する一般書としての性質も持っている。こうした点にピーリーの著作の特徴がみられる。

上記で見たように、『The Gist of Japan』は当時欧米で発行されていた新聞や雑誌などで紹介されたため、宣教やビジネスなどで日本と強くかかわりをもっていた外国人だけでなく、他の一般の人々にもより広く読まれていた可能性がある。さまざまな国や地域の出版物に掲載された図書紹介からは、日本という未知の国、人々、社会、文化全般に寄せられた当時の欧米人たちの関心の一端がうかがわれる。宗教に関しては、日本におけるキリスト教の宣教活動の状況や今後の見通しについて言及しているものが多く、読者がどの程度天理教へ興味を抱いたかは定かではない。しかし、天理教の海外伝道が開始された20世紀末という時期に、すでに外国人によって「天理教」という言葉が文書を通じて広く紹介されていたことは大変興味深いことである。

文物が語る音の世界—唐代の鼓—

天理大学国際学部教授
中 純子 Junko Naka

西域から伝来した外来音楽が花開いたと考えられている唐代音楽といえば、琵琶や簫篥などの楽器がよく知られているが、リズムをつかさどる鼓はどうだろうか。白居易の「胡旋の女」（『白居易集箋校』巻3）に、「心は絃に応じ、手は鼓に応ず、絃鼓一声 双袖挙がり、廻雪飄飄として転蓬舞う、左に旋り右に転じて疲れを知らず、千匝方周 已む時無し」とある。何度も回転するテンポのよい胡旋舞には鼓が使われた。ただ、琵琶や簫篥などの楽器の音色を美しく詠じる詩篇はあるが、鼓については、印象的な記述は見当たらない。唐代にはどのような鼓が用いられていたのか。下図は、櫛原考古学研究所附属博物館『平城遷都1300年記念大唐皇帝陵』（2010年、83頁）にみえる、惠陵の墓道に近いところよ



り出土した「彩絵陶鼓胴」である。出土時には、鼓の両端に張られた皮の一部と鉄製の縁環が残っていた。胴に描かれた絵からは、当時の華やかな鼓の奏楽が想像される。

唐代宫廷の鼓

隋代に遡るが、『隋書』卷15音楽志によると、雅楽には「建鼓」、「靈鼓・靈鼗」、「雷鼓・雷鼗」、「路鼓・路鼗」、「節鼓」の5種類が用いられた。鼓は撥で打ち、鼗は柄が中を貫いて、でんでん太鼓のように鳴らすと解説されている。さらに宴饗音楽としての外来音楽には、西涼樂に「腰鼓・齊鼓・担鼓」、龜茲樂に「毛員鼓・都曇鼓・答臘鼓・腰鼓・羯鼓・雞婁鼓」、天竺樂に「銅鼓・毛員鼓・都曇鼓」、康國樂に「正鼓・加鼓」、疎勒樂に「答臘鼓・腰鼓・羯鼓・雞婁鼓」、安國樂に「正鼓・和鼓」、高麗樂に「腰鼓・齊鼓・担鼓」と、さながら鼓のオーナードのようである。外来音楽のそれぞれに使用される鼓には共通するものもあり、あるいは隋の宮廷での奏楽のためにある程度は整理されて記されたとも考えられよう。その詳細な考証は林謙三『東アジア楽器考』の「革鳴楽器」（92～145頁）にみえるのでそれに譲りたい。『旧唐書』卷29音楽志の記載を『隋書』と比べると、龜茲樂では毛員鼓が消え、天竺樂では毛員鼓と都曇鼓が消えて羯鼓が加わり、唐代には更に外来の鼓が整備されたことが見てとれる。

外来音楽のなかでも鼓の種類がもっとも多い龜茲樂は、玄宗期に整備された宮廷宴饗音楽である「立部伎」「坐部伎」のなかの多くの楽曲に用いられた（『通典』卷146坐立部伎）。つまりは、宮廷音楽にも龜茲樂の鼓が用いられていたことになる。玄宗の兄の寧王は、夏に汗を拭いながら鼓を練習したが、そのとき龜茲樂の譜面を読んでいたという（『酉陽雜俎』前集卷12語資）。その鼓とは何だったのかわからないが、そうした逸話が残るほど龜茲樂の鼓は、玄宗期の宮廷音楽で重視されていた。ここでは、龜茲樂に用いられた鼓のうち、以後中国でも広まり、さらに日本へも普及した羯鼓と腰鼓について述べてみたい。

羯鼓

羯鼓は『通典』卷144「樂」4に解説があるように、漆塗りの桶状の胴の両側に貼られた膜面を撥で打つ鼓である。玄宗が深く愛したという故事が、晚唐の南卓『羯鼓錄』におさめられている。唐代中期、この羯鼓は、流行の舞の伴奏楽器として地方へも伝わり、文人官僚たちが宴席で楽曲に自ら歌詞をつけて楽しみ、宋代に発展する宋詞の先駆けともなっていく（拙論「羯鼓がもたらした音の世界」『東方学』第145輯、2023年）。リズムを刻む打楽器として、羯鼓が開拓した音楽文化は、玄宗の宮廷、さらに都を越えて広がり、地方の音楽文化を豊かにしていったのである。

羯鼓は海をわたり、奈良時代には日本に伝わっていた。右の図は『信西古楽図』の羯鼓である。鎌倉時代1233年成書の『教訓抄』巻9打物部には、寶亀9年（778）12月に壬生驛磨が定めた羯鼓八声が記されている。阿礼声・大揭声・小揭声・沙音声・瑞鎧声・塩短声・泉郎声・織錦声とあり、その打法が詳しく記されていて、いまにも伝えられているところから、玄宗期の宮廷で響いていた羯鼓の響きはなにがしか日本雅楽に残されていると思われる。玄宗が「八音の領袖」（筆頭楽器）とまで持ち上げた羯鼓は、現在の日本雅楽ではその奏者が曲の最初と最後に観客に礼をして始まりと終わりを告げ、中心的な役割を果たしている。



現在故宮博物院に所蔵されているとされる唐代の腰鼓が右図である（『看得見的音樂 樂器』、152頁）。細腰鼓とも呼ばれており、その名称の由来は、美人の腰のようにくびれていることなどとも言われる。腰のあたりにさげて両手で打つのである。

これも我が国に伝来している。林謙三氏は、腰鼓について以下のように述べる。

「腰鼓は飛鳥時代（隋唐初）にすでに知られ、当時の工芸品にも表現されている。その腰鼓を和名『くれづみ』と云い、呉鼓と書くのは、呉—中国南部の通称—の樂舞である所の伎楽に用いて特に著名な存在であったためか、伎楽と結び付いて始めて日本に知られたためであろう。大寶の『職員令』に伎楽の師生について云う、『伎樂師一名、伎樂生を教うるをつかさどる。その生は樂戸をもってこれをなす。腰鼓生これに准ず。腰鼓師二人、腰鼓生を教うるをつかさどる』。伎樂の樂器は横笛と鉦盤と腰鼓の三種で、鼓を最も多く用いたので、上の人員にもこれが反映している所以である」（『東アジア楽器考』、128頁）。



正倉院の復元楽器として、東京藝術大学小泉文夫記念資料室蔵の右図（『シルクロードの響き』山川出版社、2002年、106頁）のような細腰鼓がある。面白いことに、こうした形態の鼓は、実は我が国で古墳時代にすでに見られたらしい。鼓の胴の出土例が皆無のなかで、右図は、東京国立博物館所蔵の鼓奏者埴輪（群馬県境町天神山古墳（古墳後期））の貴重な例である。右手で撥をもって膜面を打ち、左手は指先でもう一方の膜面を打つか、胴体を支える役割を担っていたと推測されている（山田光洋『樂器の考古学』同成社、1998年、98頁）。林謙三氏は、日本では、この形の鼓が「小鼓」「大鼓」などと、さまざまに民族樂器化し、この類の樂器のもつ最大の長所—音色の可変、調律の可能—が遺憾なく發揮されるまでに飛躍を遂げ得たと言われる（同上、135頁）。



このように時空を越えて伝えられた鼓の魅力を考えるとき、冒頭にあげた「彩絵陶鼓胴」からも、唐代の鼓動が聞こえてくるようではないか。

ダニエル・パリッシュ・キダーは、ブラジルの民衆文化の特殊性を矮小化することなく、精緻な観察と分析を試みるなかで、ブラジル社会に根付くカトリック文化の「異質性=否定的要素」を明らかにしようとした。キダーによれば、この「異質性」とは、カトリック教会の司祭と信徒の関係や、各種宗教行事に見られる「惡習」のことであった。こうしたキダーの視座は、本連載後半で扱うプロテスタント系の学校や教会の設立に関わる人物たちが当地を調査研究する際の与件ともなり、しばしば布教の正当化の口実としても用いされることになる。

カトリック文化に内在する異質性と信徒の「無知」

1839年、キダーはブラジル北部パラー州の州都ベレンを訪れ、毎年10月に開催される「ナザレの聖母の祭り（Festa de Nossa Senhora de Nazaré）」を見学した。この祭りはブラジル最大級の宗教行事であり、現在でもカトリック三大行事の1つに数えられている。ちなみに、その他の2つは、北東部ペルナンブーコ州ブレジヨ・ダ・マードレ・デ・デウス市で行われるキリストの受難劇「パッション・デ・クリスト（Paixão de Cristo）」とバイア州サルバドルでの、アフリカ系ブラジル宗教カンドンブレ（Candomblé）にカトリック要素が融合した「ラバージェン・ド・ボンフィン（Lavagem do Bonfim）」という祭りである。

とりわけ「ナザレの聖母の祭り」と「ラバージェン・ド・ボンフィン」は200年以上続いている、多様な人種・民族・文化の歴史が刻印されている。そのため、いずれも「混血のブラジル文化」というイデオロギーと親和的な世界観を顕著に表す祭りとして知られている。また、これらの祭りの特徴は、異人種間の差異を「混血」というレトリックによって溶解させ、国民的統合を支える表象装置として機能している点である。

なお、「ナザレの聖母の祭り」はアマゾン地域の守護聖人であるナザレの聖母を讃えるもので、市民は莊厳な行列をなして聖母像を担ぎ、ベレンの中心部を練り歩きながら一年の平和を祈願する。この祭りは宗教的意義にとどまらず、地域固有の音楽・民族舞踊・料理など伝統文化を体現する場でもある。ところがキダーは、この祭りそのものの宗教的意義については肯定的に評価しつつも、宴席における参加者の態度や素行を厳しく批判し、著書 *Sketches of Residence and Travels in Brazil* (1845)において次のように記している。

パラー州には、ノッサ・セニョーラ・ジ・ナザレ祭という著名な宗教祭がある。この祭りは移動祝祭日であり、毎年9月または10月のいずれかに開催される。（…）参加者はおおむね整った服装をしており、行列の様子も非常に秩序立っていた。聖像が教会に安置されるとノヴェナが開始され、それは八夜にわたって行われた。（…）その後、人々は思い思いに教会敷地内を歩き回り、宴会、舞踏会、そして賭博を楽しんだ。なかでも賭博は最も強い関心を集めしており、多くの者が熱中する光景を目の当たりにして、私は残念に思わざるを得なかった。（…）このような娯楽や愚行にふけりながら、それでも自らを神に仕えていると信じ込まされているという事態は、まことに嘆かわしいことである。（pp. 292, 295, 297）

ノヴェナ（九日間の祈り）が終わると、人々は宴会や舞踏会、

賭博に興じた。キダーはそうした光景を目にして「残念に思わざるを得なかった」と述べ、さらに「このような娯楽や愚行にふけりながら、それでも自らを神に仕えていると信じ込まされているという事態は、まことに嘆かわしいことである」とも記している。すなわち、彼は宗教祭の本来の意図を理解しないまま賭博に熱中する人々には道徳心が欠けていると解釈し、その様子を鋭く批判したのである。さらに彼は、宗教祭の期間中に展示されていた多数の絵画のうち、とりわけ聖母が病人を治癒する姿を描いた作品について、これを「不作法な絵」(p. 296) とまで酷評している。

こうしたキダーの批判に対して、彼の伝道活動に注目したヴァスニ・デ・アルメイダとジョゼ・ネト・ソウザ・ゴメスは、人々が宗教的意義を十分にわきまえていなかったのは、カトリック司祭たちが信徒に十分な宗教教育を施してこなかったためであり、その結果、信徒たちは「無知の状態」にとどめられていたのだと分析している。そして、この「信徒の無知」こそが、のちにプロテスタント宣教師たちが布教の現場でカトリック側の抵抗に対抗する際の決まり文句（対抗言説）の一つとして流布されていったのだと指摘している。⁽¹⁾

ブラジル的カトリック表象とその文化的特性

こうしたキダーの批判は、「信徒の無知」と相まって、ブラジルは「遅れている」という認識が、プロテスタント宣教師たちのあいだに根付いていく一因となった。しかし、こうしたブラジル人像とは逆に、宗教祭や絵画などで顕在化していた諸表象は、ブラジル固有のカトリック文化として理解すべき多層的な表象慣習の総体であった点について、キダーは十分に理解していなかったといえる。

ある意味で、キダーの調査は自らの見聞を「広げる」ことにとどまり、差異の指摘=批判へと一直線に接続する構造を内包していたため、差異の記述は必然的に「異質性」といった評価枠組へと直結してしまったのである。キダーが理解しえなかったブラジル固有のカトリック文化とは、いわゆる「クレオール主義」⁽³⁾の文脈に属するものであり、そこでは白人・黒人・先住民といった異質な文化的価値観が混淆することで生成された新たな文化の産物であった。このような前提に照らせば、聖母表象や宗教祭における賭博にみられる「自由度の高い表象」も、厳密な支持対象をもたず、むしろ操作可能な表象として人々の間に受容されていたと考えることができる。したがって、キダーを困惑させたのは、まさにこのブラジル独自の異種混淆性にもとづく文化的生成の構造そのものであり、その実態を十分に把握できなかった点にこそ、彼の観察の限界があったといえよう。

[注]

(1) Vasni de Almeida, José Neto Sousa Gomes. “Daniel Parish Kidder: sociedade, identidade e cultura nas narrativas de um protestante viajante no século XIX.” *PLURA, Revista de Estudos de Religião*, vol. 7, no. 2 (Jul-Dec 2016), p. 108.

(2) 同上、p. 116.

(3) ここでいうクレオール主義とは、歴史学者エドワード・カマウ・ブラスウェイト（Edward Kamau Brathwaite）の定義に基づくものであり、異なる起源をもつ文化要素が混合し、その混合過程から新たな文化的生成が生み出されていく動態を重視する立場を指す。

ニューヨークのホリデーシーズン

天理教ニューヨークセンター所長
福井 陽一 Yoichi Fukui

10月末のハロウィンが終わると、ニューヨーク市は一気にホリデーシーズンへと移行し、街全体が華やかな装いに包まれる。今年は市政400周年にあたる節目の年でもあり、例年以上に祝祭的な雰囲気が高まっている。感謝祭から新年にかけては、約800万人の来訪者が見込まれている。

感謝祭（サンクスギビング）は毎年11月の第4木曜日に祝われ、アメリカ文化において重要な位置を占める。その象徴的な行事である「メイシーズ・サンクスギビングデー・パレード」は、1924年に初めて開催され、それ以来アメリカにおけるホリデーシーズンの幕開けを告げる伝統的なイベントとして定着している。沿道には約350万人が集まり、自宅で中継を視聴する人は5,000万人を超えるとされる。

また、ロックフェラーセンターの巨大なクリスマスツリーをはじめ、各地で行われるイルミネーションやホリデーマーケットは、訪れる人々を魅了し続けている。特に文化協会の近くにあるユニオンスクエア・ホリデーマーケットは代表的な人気スポットとして知られ、多くの人々が家族や友人、恋人への贈り物を求めて訪れる。これらの文化的催しは、経済的側面のみならず、都市の連帯感や季節感の共有といった社会的意義を持つといえよう。

ホームレス児童の増加

しかし、こうした華やかな光景の背後には深刻な社会問題も存在する。近年、ニューヨーク市の公立学校に通うホームレス児童の数が過去最多を更新し、全生徒の7人に1人に相当する約15万4,000人に達したと報告されている。この背景には、住宅費の高騰や経済的困窮に加え、不法移民の流入が影響しているとされる。若年のシングルマザーがシェルターで生活を余儀なくされる例も少なくない。

統計によると、ホームレス状態を経験した生徒のうち、約6万5,000人が市内のシェルターに滞在し、約7,000人がモーテルで暮らしている。また、シェルターで暮らす生徒の約67%は、慢性的な欠席を繰り返し、学力評価において学年相当水準に達している者は22%にとどまる。2025年11月に予定されているニューヨーク市長選挙では住宅危機問題が主要な論点となっているが、こうした最も脆弱な層の子どもたちへの支援は依然として不十分である。表面的な好景気の一方で、格差拡大が顕著となるアメリカ社会の現状は、弱者への支援の在り方を再考させる契機ともなっている。不景気が続いていると言われている日本のはうが、むしろ生活しやすく弱者に優しい社会なのかなと感じる。

MAHA運動の展開

近年、アメリカ保健福祉省のロバート・ケネディ・ジュニア長官が提唱する「メイク・アメリカ・ヘルシー・アゲイン（Make America Healthy Again, MAHA）」運動が注目を集めている。同長官は、2025年11月、米国におけるすべてのワクチンから水銀系保存剤を完全に除去したと発表し、世界の保健当局にも

同様の措置を呼びかけた。また、自閉症の増加要因を究明するための大規模な研究を推進し、妊娠中のタイレノール（鎮痛剤）服用が自閉症リスクに関連する可能性を指摘している。

アメリカ疾病統計によれば、8歳児の32人に1人、男子では12人に1人が自閉症と診断されており、1970年代の「1万人に1人以下」との報告から著しい増加を示している。ケネディ長官は20年以上にわたり、米国の子どもたちの慢性疾患の終息を目指しており、同運動は国民的健康意識の再興を促す取り組みとして期待されている。

ニューヨーク天理文化協会においても、自閉症などの発達特性を持つ子どもたちが日本語を学んでおり、教員とスタッフが一体となって心を込めた指導を行っている点は注目に値する。

文化協会の活動と地域社会への貢献

ニューヨーク市の物価上昇は市民生活に大きな影響を与えており、文化機関の運営にもその影響が及んでいる。天理文化協会も例外ではなく、家賃や維持費の上昇により財政的に厳しい状況にある。しかし同協会では、大人クラス約200名、子どもクラス約170名が登録しており、日本語教育と文化交流の拠点として重要な役割を担っている。

2025年の夏季には、初の試みとしてサマークラスを開講し、教員らが休暇を返上して授業を行った。子どもたちは毎回の授業を楽しみに通い、保護者からも高い評価を得た。この成果は、教員の献身的努力の賜物といえる。

さらに、国際平和デー（9月21日）には「インターフェイス平和の集い」が開催され、広島・長崎からの平和メッセージ紹介、諸宗教の祈り、天理教代表による追悼の詞や雅楽演奏が行われた。行事の締めくくりとして、ユニオンスクエアまでの平和ウォークが実施され、宗教・文化を超えた平和への連帯が確認された。

ニューヨークは、世界的文化都市としての華やぎと同時に、深刻な社会的不均衡を抱える都市でもある。こうした現実を直視し、文化的活動と社会的支援を両輪とした都市社会を構築していくことが、今後の課題である。天理文化協会はその一助となるべく、地域社会に根差した文化活動を実践している。



インターフェイス平和の集い（文化協会にて）

第6講：「元の理」の見立て・象徴論

天理大学人文学部准教授
澤井 真 Makoto Sawai

こふき本に含まれる教理については、人間身の内における守護の説き分け、かしもの・かりもの、心のほこり、いんねん、かんろだい、つとめとさづけ、をびや許し、出直しなど多岐にわたる。こふき本をめぐっては、教祖が高弟たちに作成を命じられていたが、たとえば山澤良助が提出したものをご覧になった際には、よいと仰せにならなかった。しかしながら、こふき本は天理教教理を理解するうえで重要であることに変わりはない。

こふき本の特徴について、『こふきの研究』(1957年)における中山正善2代真柱の指摘にあるように、年代が下るにつれて、こふき本の内容が増していく。こふき本は一つの写本から筆写されてきたことが推測されるため、「正冊」を探す作業が行われてきた。教理や見立てなどに関して、こふき本が徐々に“厚み”を増していく背景には、教祖がよいと仰せにならなかったからということがあるのではないかとも考えられる。

日本文化における「見立て」

「見立て」という語は複数の意味をもつ。『デジタル大辞泉』によれば、①見て選び定めること。②病気を診断すること。③予測すること。④〈ア〉あるものを、それと似た別のもので示すこと、〈イ〉俳諧で、あるものを他になぞらえて句をつくること。⑤思いつき。
⑥見送り、などの意味で使用されている。また、この語は『古事記』(712年)の神代記に見えるが、そこでは「その島に天降りまして、^{あも}_{みはしら}天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。」のように使用されている。

見立ての意義としては、表面上で与えられているものの背後にある一貫した意味を創造的想像を通して構成することにある。この点について、尼ヶ崎彬は隠喩という言葉との比較から、『見立て』とは対象を取り扱う主体の態度に注目した言葉であることを指摘している。つまり、見立てとは、ある言葉がその内奥にあって指示す意味を、その言葉を受け取った者がいかに解釈し理解するかという、主体側の意味理解の問題である。そのため、見立ては必ず「仕立て」(コンテキスト)を必要とする。

教語としての「見立て」

天理教における見立てについては、この語を誰がいつ使用はじめたかは不明である。また、見立てとは、こふき本の本文で使用されたわけではなく、後代の信仰者がこふき本を理解するうえで、親神の守護が神仏等に見立てて説かれていることを示すために用いてきた語である。ただし、これまで指摘されてこなかったこととして、「見立て」の語は「おさしづ」のなかで使用されているという意味で、教語の一つと理解することができることである。

「おさしづ」で使用される「見立て」の語の意味としては、2つに大別することができるだろう。まず、「見て選び定めること」という意味については、「当分の処見立てゝ、三十日だけでも養いの心育てゝやつてくれへ。」(「おさしづ」明治40年3月22日)という文中に見出すことができる。さらに、「あるものを似た別のもので示すこと」という意味については、「理と理と親子なるこのやしきへ入り込めば、年取りた者を親と見立てるよう。」(「おさしづ」明治22年10月14日)という仕方で用いられている。ここでは、血縁による親子関係ではなく、信仰的関係性に基づいて、おやしきでは年上の者を自らの親としてみなして通ることが説かれている。このように、年長者を親というかたちで捉え、行動していく際に見立てという語が用いられているのである。

見立てから説き分けへ

天理教内で長らく見立てと呼ばれてきたものを、裏守護の一部として捉えようとしたのが石崎正雄である。石崎が「裏守護」という語を用いる背景としては、諸井政一が『正文遺韻』において「うちのちにつきてのはなし」(裏の道につきての話)と表現したことが挙げられる。すなわち、親神の十全の守護(表の道)に対する、神道・仏教・民間信仰などを通して示される守護(裏の道)という対比である。ただし、その際に生じてくる問い合わせとしては、十全の守護のなかで取り上げられる神仏が示す守護は本来共通しているはずであるが、共通性を認めることができない際にいかに理解するかという点である。

そこで導入したいのが「説き分け」と「象徴」という視点である。「見立て」が親神の守護を仏教的・神道的コンテキストから理解するのに対して、「説き分け」は神道にまつわる神名や泥海中の動物を通して、親神の守護を象徴的に捉える理解である。ここで言う「象徴」とは、抽象的な事柄を具体的な事物や感覚的なことばで置き換えて表わすことである。また、見立てや裏守護が十柱の神名を神仏等に置換する視座である一方で、説き分けは親神の人間にに対する十全の守護を神仏等を通して説くという視座である。その目的は、人間創造とかぐらづめの結びつきを伝えることにある。

和歌体十四年本(山澤本)では、「とふねん巳の…」と年齢が記されるが、この点は十六年本以降には見られない。ここでは、当時、実在した8人が人間創造時に引き寄せられた十柱の神名に対応させるかたちで説明される。

このやあつにんげんたまひどふぐなり

これにみなへかみなをつけて

また、和歌体十四年本(堀内本)でも、引き寄せられた道具に神名を付けて表されている。

このどをぐもとのところへひきよせて

にんげんとなしこれにかみなを⁽⁴⁾

これらのこふき本から理解できるのは、守護と神名の関係性について、親神の守護に対して神名が配されて説き分けられていることである。このとき、十柱の神名とは不可視である親神の十全の守護を具体的・可視的に表したもの、すなわち象徴と捉えることができるだろう。したがって、こふき本で示される神仏や動物は、親神の守護の多様で多相的な表れとして捉えることができるだけではなく、当時のコンテキストに沿って、分かりやすく重層的に説き示されたものと捉えなおすことが可能となる。

こふき本を読み解く視座を見立てから説き分けへ転換するとき、世界の多相性は「神のからだ」である親神の十全の守護へ収斂していく。同時に、信仰者がそれぞれの置かれたコンテキストから教えを読み説いていく状況を創り出す。そのため、こふき本は私たちが生きる時代に教えを適用させ拡張させる機能を与えてくれる。「元の理」が絶えず開かれ、解釈の余地や余白を多く残しているということこそが、道の教えの豊かさにつながっているのである。

[註]

(1) 「見立て」(『デジタル大辞泉』 <https://kotobank.jp/word/%E8%A6%8B%E7%AB%8B%E3%81%A6-638383> 2025年9月24日アクセス)

(2) 次田真幸『古事記』(上) 1977年、講談社学術文庫、40頁。

(3) 尼ヶ崎彬『日本のレトリック』花鳥社、2023年、32頁。

(4) 沢井勇一「和歌体十四年本『こふき話』の対照覚え一山澤本と堀内本一」『史料掛報』第121号、1967年、9頁。

日本宗教学会第84回学術大会に参加

堀内 みどり

9月14日（日）～16日（火）の3日間、標記学術大会が上智大学を会場に開催された。14日には開会式の後、公開シンポジウムが「大学で宗教（学）を教える」をテーマとして開催された。15日及び16日には、11の部会（録画部会を含む）で個人研究とパネルの発表が行われた。天理大学関係者の発表は以下の通り。

澤井義次：宗教理解への視座—井筒俊彦とウィルフレッド・C・スミス（パネル「井筒『東洋哲学』の立場—比較宗教思想の視点から—」代表）

ファン・ホセ・ロペス・パソス：井筒東洋哲学から読み解くオルテガ一生の理性とコトバ（上記パネル）

深谷耕治：和辻哲郎の宗教研究—『倫理学』を中心に
澤井治郎：米国におけるニーバー・リバイバルとその後

金子昭：天理教における“事情教会”問題—新たな展開の可能性への模索—（パネル「宗教団体における実践と論理」）

加藤匡人：On Politics and Governance in Japanese Religions（国際委員会企画パネル New Directions in the Study of Japanese Religions: Reviewing New Nanzan Guide）

森下三郎：M. ジャクソンの儀礼研究における再帰的過程について

山本佳世子：欧米における無宗教チャップレンの展開—日本との比較から—

岡田正彦：円通『実験須弥界説』を読む—近代的自然観と仏教思想—

日沖直子：鈴木ビアトリスと神智学的ユニヴァーサリズム

また、他に天理教関連の発表が1つあった。

村山元理（駒澤大）：経営哲学としての「かしもの・かりもの」

第4回天理大学・マールブルク大学共同研究プロジェクト報告

澤井 真

10月11日（土）～13日（月）の3日間、天理大学創立100周年記念 第4回天理大学・マールブルク大学共同研究プロジェクトが天理大学を会場に開催された。天理大学と長年にわたり交流関係にあるドイツのマールブルク大学から宗教研究者らが来訪し、活発な学術交流が行われた。

第4回目となる今回、「宗教との邂逅—旅・紀行・もの—」が統一テーマとなった。このテーマを討議することになった背景の一つに、2020年以降に猛威をふるったコロナウイルス感染症の影響があった。コロナ禍では人やものの移動が制限されていた。そうした状況から、人々が再び邂逅しつながっていく仕方はそれまでと少なからず変化を伴ってきた。また、今回のプロジェクトが天理大学の創立100周年を記念して行われることから、創立

100周年のテーマである「CONNECT—『つながる』を、始めよう。」に基づき、宗教同士が邂逅し、つながる際の接触面について考察することになった。各セッションでは、森下三郎、澤井義次、島田勝巳、堀内みどりがディスカッサントを務めた。

オープニングセッション

永尾比奈夫：資料を通して信仰者と出逢う—宗教への眼差しとバランスの重要性

セッション1 旅

バーベル・ペインハウэр・ケルヒャー：宗教と邂逅し、宗教を媒介する—中世期ムスリム旅行者らの眼差し—

岡田正彦：井上円了の世界旅行と「星界想遊記」—近代国家への憧憬と近代人の神—

ローレント・ミニヨン：クロード・ファレール（1876-1957）の著作に見るトルコ・日本・宗教

深谷耕治：和辻哲郎の『古寺巡礼』再読

セッション2 紀行

フェルディナンド・リフェルト：文化を探求し、人々とつながる—二代真柱の海外渡航—

尾上貴行：天理教布教師の紀行にみる異宗教間接触—1910年代初期の天理教ロンドン布教を事例として

カティヤ・トリプレット：天理大学附属天理図書館における初期イエス会士の旅行記—稀覯書を通じた宗教との出会い—

澤井治郎：パウル・ティリッヒの日本旅行記

セッション3 もの

ゲアハルト・マーセル・マーティン：「…そして手足の衝動と疲労を感じる」—現代の宗教的・文化的実践における忘却と身体性の回復—

澤井真：ものがつながる—宗教的邂逅の記憶—天理教とイスラーム—

ゲアハルト・マーセル・マーティン：身体—宗教の邂逅における「もの」の一側面

東馬場郁生：物質論的転回？—近世初期日本のキリスト教の理解について—

2026年度公開教学講座のご案内

—「布教伝道と伝道学」—

2026年は、私たちが天理教教祖140年祭を迎える年であり、また、おやさと研究所が1956年9月に現在の名称となってから70年目の記念すべき節目の年でもあります。この希有の年に、おやさと研究所では年祭記念企画として、公開教学講座シリーズ「布教伝道と伝道学」を開催することになりました。

この公開教学講座シリーズはおやさと研究所の研究員全員が担当し、2026年4月から2027年2月まで（8月を除く）全10回のシリーズとして行います。

グローカル天理

第26巻 第12号（通巻312号）

2025年（令和7年）12月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社

Printed in Japan